



小太りで冴えない派遣社員・・・そんな僕が日々のストレスで
疲弊しきっていた時ふと気になる情報をネットで目にしたんだ。

そして訪れたのは歌舞伎町の雑居ビル・・・

「いらっしやいませ。はじめてのお客様ですか？」
「はっ、はい！」

「ではシステムをご説明しますね・・・こちらのソファへ
おかけくださいませ。」



社長秘書を思わせる受付の女性はフェロモン満点のプロポーションでミニスーツを着こなしている。

目の前には見事な胸の谷間が……彼女の魅力とこれから体験するであろうプレイを想像して股間は見事にテントを張っていた。受付の女性はそれをちらりと見て僕の横に腰掛けた。

ん……

「お客様も数分後には見事な女の子に変身できますわ……少しの間ご説明させて頂きますね。」

いっ

「あつ、あの……もしかしてあなたも男性なんですか？」

「フフフ、ご想像にお任せします。では当店のシステムですが……」

ズッ

もうすぐ隣りに座った美女のようになれるんだ



「お客様、そろそろ10分になります。そろそろよろしいかと・・・」

「はっ、はい！」



僕の身体はローション風呂で温まりあそこはまちきれないように勃起している。
いよいよだ……

「さあこちらが例の皮ですわ……」
「……………」

か、皮?! これで女の子になれるのか??

「おっおお・・・」

透明だった皮は不思議な色合いに変化している。
柔らかな肌のような肌触りだ・・・



「色が変わりましたわね。では湯船を出てゆつくりと装着して下さい。」

「これを・・・」

「ええ・・・早く女の子になりましょう・・・」

甘くエッチな声に促されて僕は皮を着込んでいく・・・

「くっ、き、きつい・・・」

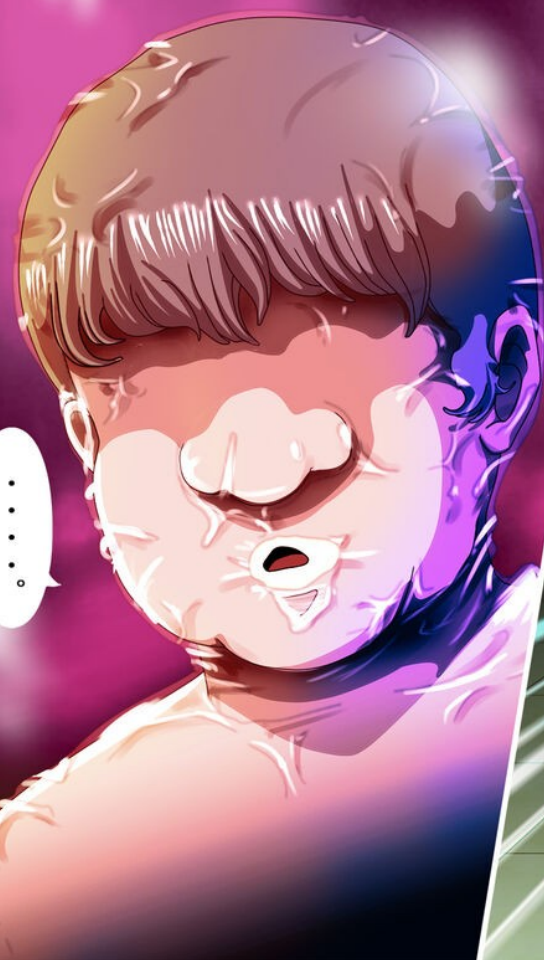
しかしネットリとしたローションのおかげで皮の中に僕は滑り込んでいく。

う？

「あつ、あの・・・着たんですけど、これでいいんですか??」

僕の身体に皮がピッタリと覆う・・・膨らんだ腹と更に膨らんだ股間が汚らしい。」

こんなの・・・いくらなんでもヒドイ・・・



「大丈夫です、ほら始まりましたわ。」

「おっ、おっっ！」

皮が僕を締め付けるように動き出す。
身体全体がみるみる変化していく。だらしなく膨らんだ腹が
キュッとくびれた感じに変わりヒップも桃のようにプリンとした形状を
作り出していく。

ぴゅん

「はあっ！」

短足で毛深かった脚もスラリと伸びていく……
みるみるすべすべの脚線美へと置き換わっていく感じた。

「大丈夫ですかお客様。」

「はっ……はい……。」

「声が女体化してきてますわね。では女の子への変身をお楽しみ下さいませ」

「あっ、ああん……」

皮を突き上げていた股間の一物がおもむろに小さくなっていく。

「おっ、おおっ・・・ちんこがなくなつて股間がのっぺり状態に・・・ああっ！」

「はぁ、股間が完全に女の子に・・・ああっまた!？」

いつの間にか狭くなった肩幅、そしてベツタンコだった胸がみるみる膨らみ始める!

「おおっ！」



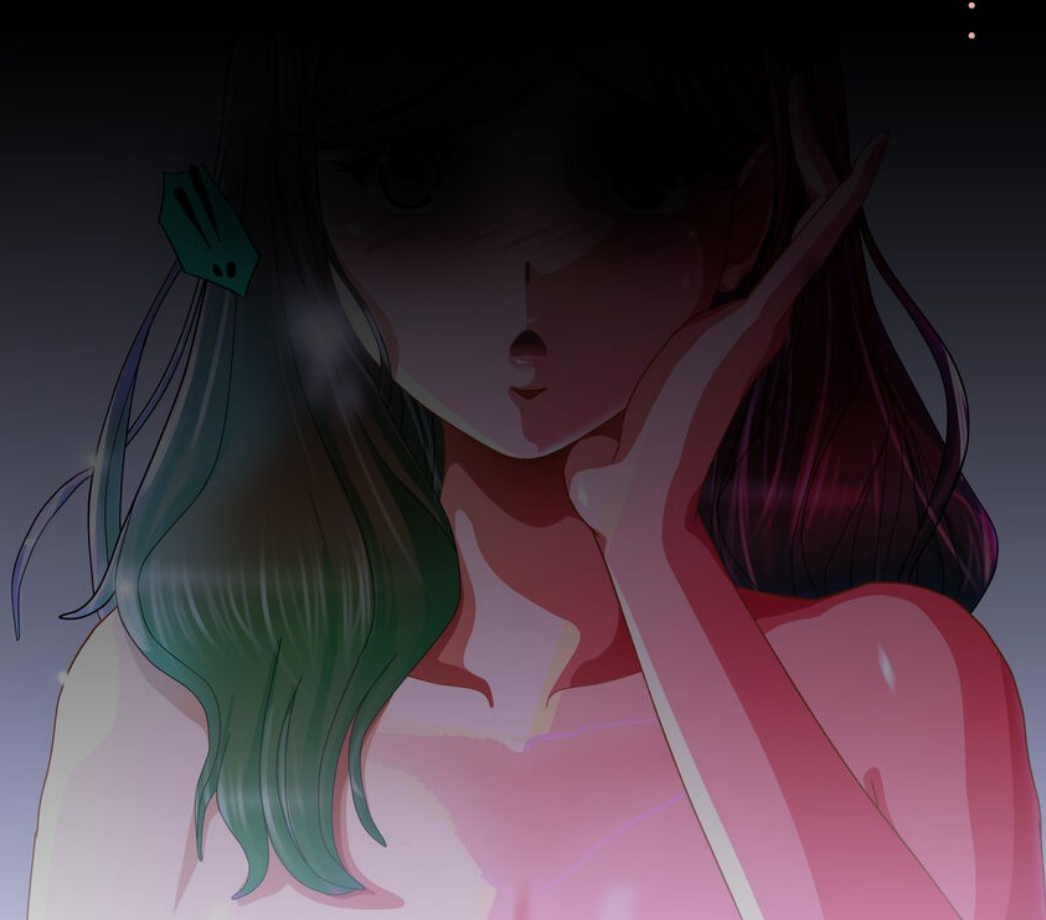
快感を伴いながら膨らんでいくおっぱい・・・ぷるんと揺れる未体験な感覚もたまらない。

「あっあっ、おおん!!」

最後に乳首が形成され僕の身体はエクスタシーを迎える。

お客様、
お客様……

……んん



「お客様、お客様？大丈夫ですか？」

一瞬意識をなくしていたらしい。
目の前には受付嬢の心配そうな顔があった。



「ん……ん、だ、大丈夫。こ、興奮しすぎちゃて……」

「はあ良かった。お客様、声も見事に女性の澄んだ声ですわね……
皮の装着は完璧です。」

確かに壁一面を覆った鏡には受付嬢と全裸の女の子が写り込んでいた。

「では私は席を外しますね……」

「えっ？」

「……変身したご自分を確認したいのでは？すぐに女の子のオナニーを体験したいとおっしゃるお客様も多いんですよ。」
オナニー……この身体で、僕が女の子として「人エッチ……」

「はぁ……かわいい。それになんてエッチな身体なんだ！」

彼女が部屋を出ていった後、僕は変身した自分に夢中になっていた。色々ポーズを変える、当然鏡の中女の子が連動して動く……間違いなくこの女の子が僕なんだ。

「あぁん！」



「はあ、プルプルして柔らかい……おおっ。」
目を閉じおっぱいを揉みしだく。

胸からの快感という未経験の気持ち良さが全身を覆う。

「はあん、イイッ！」女の子の可愛い声が響く。

僕はもう動物と化していた。

「くはあ……あそこが、あそこが……」

男の時は勃起する股間がノッペリしたまま……でもその代り愛液が
後から後から溢れ出てくる。

Www

ワキツツ

「はあ……なにこの感じ……」



「おぉん!! 気持ちいい!!」

テカテカに濡れた股間に触れた途端、全身を貫くような快感、
これはたまらない!!

男性器を乱暴にシゴくのととは違いやさしくこねくり回す・・・

はぁ、はぁ・・・イイ。

鏡の中で快感に狂う女の子、これは僕なんだ・・・はぁ、それを思うと強烈な
快感が・・・あぁっ!!

はぁ

んんん

はぁ

びゅん

「ほぁぁ、もう!!」

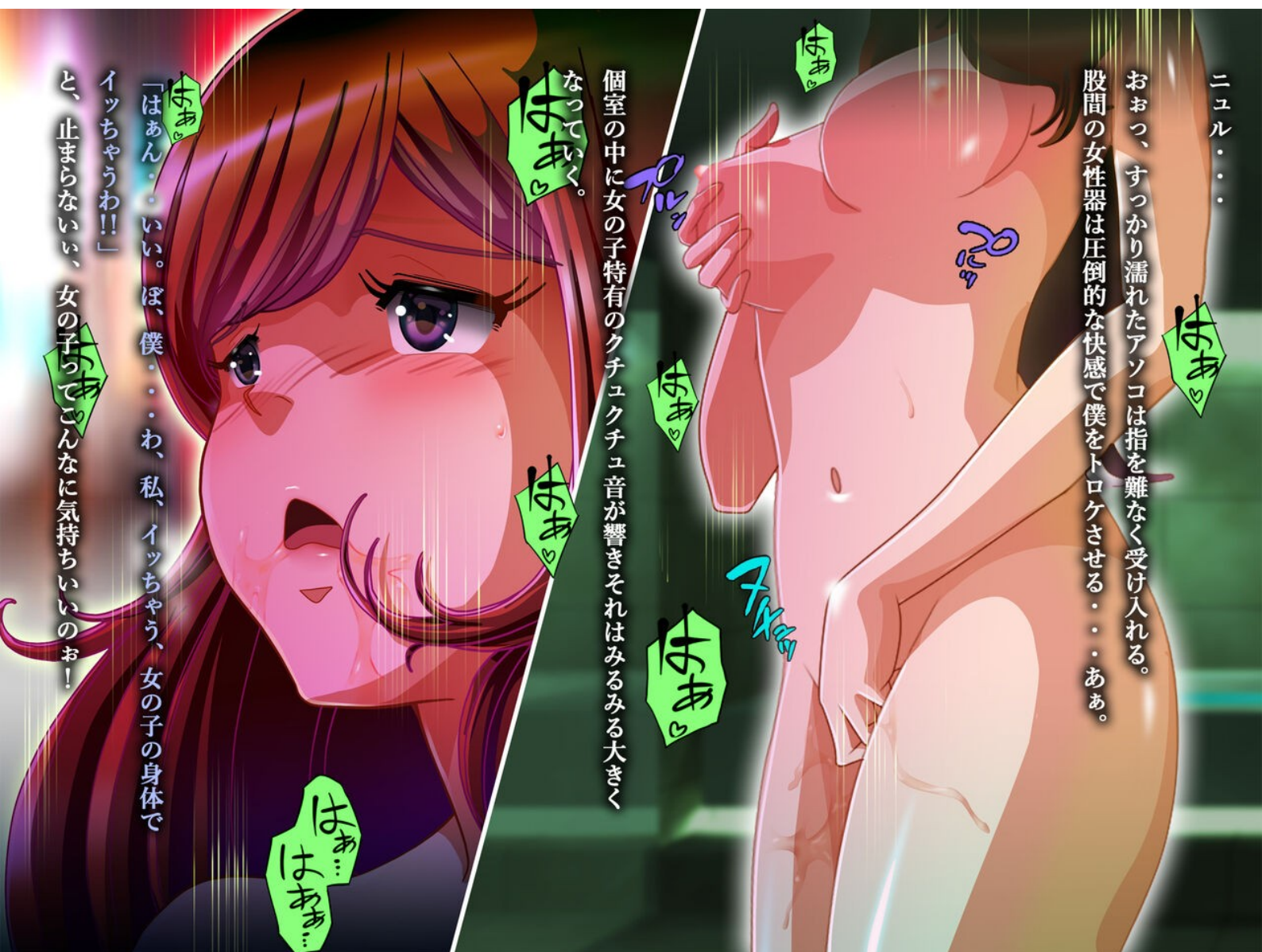


ニユル……

おおつ、すっかり濡れたアソコは指を難なく受け入れる。
股間の女性器は圧倒的な快感で僕をトロケさせる……ああ。

個室の中に女の子特有のクチュクチュ音が響きそれはみるみる大きく
なっていく。

「はぁん……いい。ほ、僕……わ、私、イッちゃう、女の子の身体で
イッちゃうわ!!」
と、止まらない、女の子ってこんなに気持ちいいのぉ!



お客様、

お客様大丈夫ですか？

はあ・・・はあ・・・

はあ・・・



「いかがでした。女の子になって自らを弄ぶのは……」
程なく現れた受付の女性にはこやかに話しかけてくる。

はあ・・こんなに気持ちいいなんて・・・
なかなか引かない快感に戸惑いつつもウットリしていた。
「ええ・・とつても・・とつても気持ちよかったです。」

僕にそつとバスローブを掛けてくれる。
バスローブがちよつと触れるだけでもなんだか気持ちいい・・・はあ。

ゆあ…

「まだ気持ち良いのでしょうか？女の子の身体は快感をなかなか
手放しませんの・・・エッチに出来ているんですわ。」

「……」
「でもこれからが本番。お客様がリクエストされたプレイはこれからです、
参りましょ。」



数分後、僕は妖しい衣装部屋にいた。

「さあ、こちらですわ、お客様がリクエストされたコスチュームは。」
差し出されたコスチュームはハイレグで極端に布地が少ない……。

こんなコスチュームでも男が着たら変態、女子が来たらエロ光線が
出まくりで喜ばれる、なんか不平等だ。

「よろしかったら私が着替えお手伝いしますが……いかがいたしますか？」
「えっ、いいんですか？」

「お客様、今日が初回ですしサービスさせていただきますわ。」
こんな美人に着替えさせてもらえる、はあたまらない……。



「さあ、レトスクリーンになりましたようね……」
股間がもうジュワジュワし始めていた

「さあ、レースクイーン用のパンストです。光沢があってきれいでしょう・・・」

「えっ、ええ・・・」

「お客様、失礼ですが履かれたことあるのでは？」

「えっ!？」

「女の子になりたいと当店に来られる方、大体そうなのですよ。」

女装くらい・・・ね。」

僕は頬を赤らめるしかなかった。

「でも今回は女の子として装着です・・・さあ脚をお通し下さい。」



「はっ、はぁん・・・」

僕の脚が光沢を帯びたパンストに覆われていく。

「気持ちいいでしょ?すべすべの脚とパンストの擦れる感覚・・・」

「はっ、はい・・・」

スルスルと音をたて僕の長い脚はパンストに包まれいく。

美しい脚は更に妖艶さを増し、僕の股間は再びジュワジュワが止まらなくなっていた。

ハイレグが股間を包む。

「はぁん・・・」

パンストとハイレグの締め付けがたまらない・・・。

僕がうつとりしている間にぶるんと膨らんだ胸がハイレグに包まれていく。

しかしその膨らみはタイトなハイレグに包まれてもなおプリンと女の子を主張している。

んあッ
やみ

「お客様、大きい・・・素晴らしいですわ。」

みるみる全身がハイレグに覆われ見事な女の子のシルエットが完成する。

「さあこれで最後ですわ・・・」

「あつ、あぁん！」

肩がけ布がクイッと掛けられる。

同時に股間が連動して食い込みを増し思わず声が出た。





「はぁこれが・・・これが僕。」

鏡にはレースクイーンに変貌した女の子が写っている。

鏡に手をつくると鏡の中の女の子もそれに連動する・・・間違いなく僕だ。

一時間前は小太りで冴えない派遣社員だったのに信じられない。



はぁ、可愛い。

股間には早くも

大きなシミが広がっていた。

後ろを向いたりわざと上目遣いで可愛い表情をしたり・・・
こんなに完璧にレースクイーンになれるなんて夢みたいだ。

ハイレグをさらに引き上げる。

「はっ、はぁあん！イイっ。」

僕は再び女の子の身体の快感を味わおうとしていた。



「・・・着替え終わったら受付は来てくれて・・・迎えに来てくれば
いいのに。」

廊下に僕のヒールの音がコツコツと響いていた・・・

はぁ・髪の毛のいい匂い・なんか女の子の甘い香りが自分自身から漂ってくる。

「はぁ・・・」

歩きたびにおっぱいが揺れる・それに・・・ヒールの音。
自分が女の子のなってる感覚がたまらない。

その時、人の気配を感じフツと横を見た。

しかしそれは壁に設置してある姿見だった。トロけそうなほど可愛い女の子が驚いた顔をしてこちらを見ている。



・・・ああイイ・・・

「何だこんなとこにいたのか!」

えっ!?

「一体何やってたんだ、もう集合時間だろ！」レーサーらしい男が高圧的に僕を部屋に連れ込んだ。

「えっ!? 何? 意味が分からないよ・・・」

「レースクイーンは30分前には集合、聞いてなかったのか! それになんだその口の聞き方は! 女の子らしくちゃんと喋れ!!」

女の子になってみるとぜんぜん違う・・・男ってこんなに身体が大きくて威圧的なんだ。



「わ、私・・・」

思わず女の子として返事をしてしまう。

ここも右壁が全て鏡になっている・・・そこにはガッツシりと仁王立ちするレーサーと一回り小さく華奢なレースクイーンが写っていた。

「あつ、何するんだ!？」
後ろから僕の胸を・・・

「女の子がそんな口の喋り方しちゃダメだよ」

「あつ、ああん!やめ・・・て」

「そうそうイイよ・・・まあいくら騒いでもこの部屋は防音だ・・・」

「なっ、なんですって・・・」



「遅刻したバツだ、楽しませてもらうよ。」
「ああん!!」

ベッドに押し倒される!!

「やつ、やめなさい・・・」

「そうそう、女言葉だとほんとに可愛い。こんな可愛いレースクイーンとセックスできるなんて最高だな!」

僕が可愛い?それになんだろう求められてる感じがジュワジュワしてくる・・・
「ああ・・・」

「抵抗してもどうせ女の子の力じゃ限界がある・・・ほらあ。」
フロントのファスナーがゆっくりと降ろされていく・・・



「おおっ!? 見事なおっぱい・・・乳首もピンクでみずみずしい果実みたいだ!」
コスチュームから開放された途端、僕のおっぱいがぶるんと揺れる。



「はぁん。やめて、へ、変態!」
その言葉も揺れる感覚も自分自身をウットリさせるだけだった・・・
あぁん、なんだこの感じ。

「おおっ、うめえ、これがあの宇佐美玲子のおっぱいかあ。」
僕のおっぱいにムシャブリつく男。
股間部分が異様に膨らみビクビクしている

今の自分は襲う側ではなく襲われる側なんだ。
はあ……



「や、やだ……。」「強引にキスされる。」

「何が嫌だ、股間はしつかりシミができてるぜ。」

「お前のあそこは女性器が付いていて男を受け入れるように出来てるんだよ」

くぱあー

はっ

くちゅ

僕はみるみるコスチュームを脱がされ、悩ましい身体をさらしていた。

「くはあ、これが宇佐美玲子のスッポンポン!!」

「やん!! だめえ、そ、そこは!!」





「はぁ、はぁん……」

室内にチュパチュパと舐める音が響く……

でもなんでこんなに気持ちいいの……あぁ。

ああ……

チュパ……

ギンギン

息を荒くしながら男がレーシングスーツを脱ぎはじめる。
股間にアレがそそり立つ。

はぁ・・・でも・・・イヤ。

我慢汁をダラダラ垂らしながら僕と交わろうと
ピクンピクンしている。

しる

「だめっ！セ、セックスはだめよ。」

「そんねエロい身体してなに言っただよ。いつもその身体にエッチな
ハイレグ着て・・・男を発情させるお前が悪いんだよ！」

「ヤダ！変態!!」

僕と交わろうと股間を目指し腰を近づけてくる・・・

「だめなの・・・セックスは・・・もう。」

はぁん

!!

「ほらほらあゝこれでも嫌なのか？どうだ？」

「あ・・ああん・・・」

男の先っぽが僕の女性器を出たり入ったり・・・部屋にヌチャヌチャ音が響く。

「これを見ると女はたまらないんだよねもつと入れてほしいんじゃないのか？ええ？」

「はあ、はああん。もう・・・」

息も絶え絶えのエッチな声が僕の口から漏れる・・・。



あそこからの快感だけじゃない。
胸の揺れなんかも僕を欲情させる・・・だめえ。

「あああん・・・!? ヤダ、ぬ、抜いて・・・」
僕の中にアレがズブズブ入ってくるう・・・なにこれ・・・

「はあ、たまんね〜もつと奥へ・・・ほお!!」

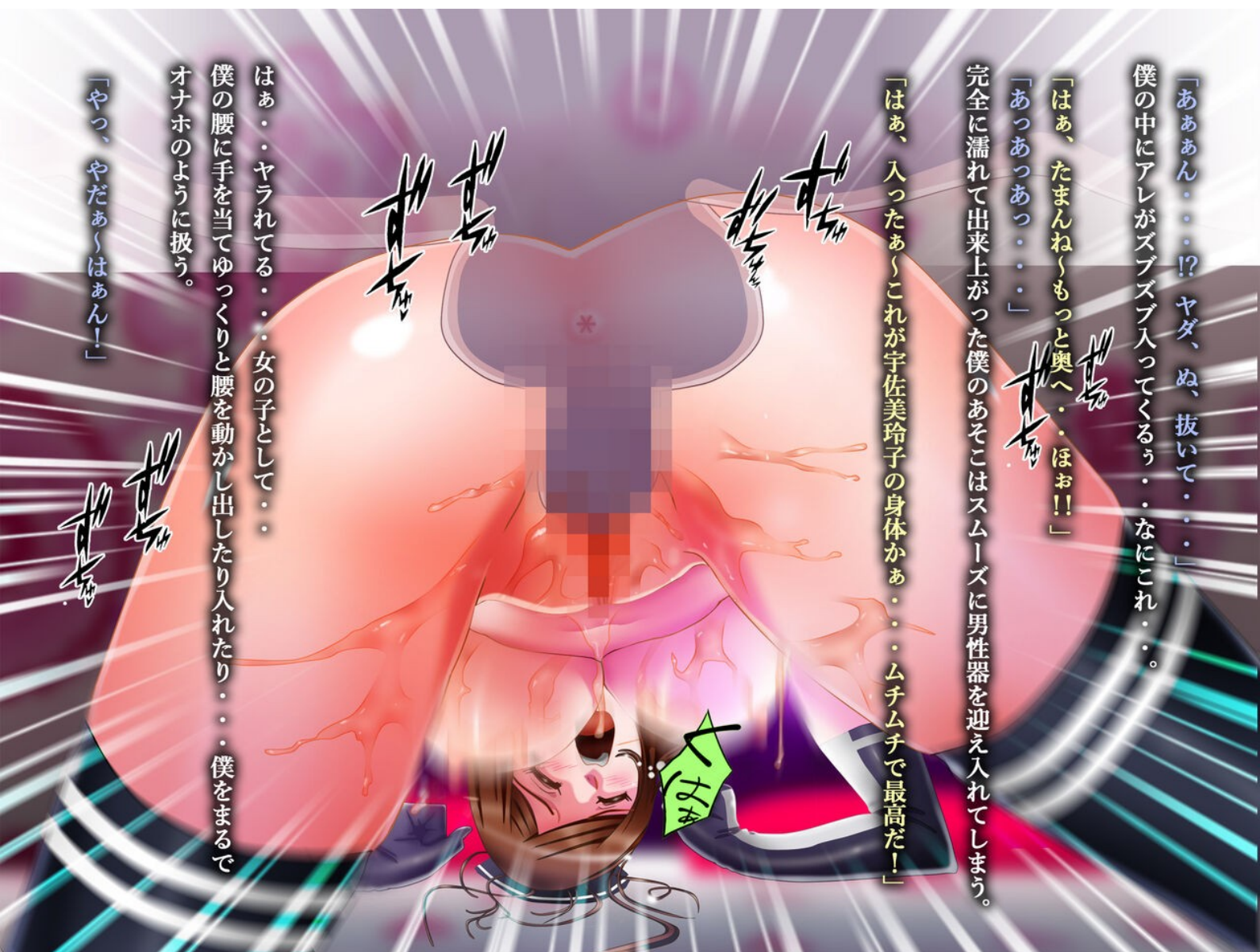
「あっあっあっ・・・」

完全に濡れて出来上がった僕のはそこはスムーズに男性器を迎え入れてしまう。

「はあ、入ったあ〜これが宇佐美玲子の身体かあ・・・ムチムチで最高だ!」

はあ・・・ヤラれてる・・・女子として・・・
僕の腰に手を当てゆつくりと腰を動かしたり入れたり・・・僕をまるで
オナホのように扱う。

「やつ、やだあ〜はあん!」



「あの宇佐美玲子が四つん這いでエッチな声を上げてやがる。くはあ今にも出そうだ!!」

男から卑猥な言葉を投げかけられる度にたまらなくなる……
なんだのこ感じ……

「おい見ろよ!」男が指さした先には壁一面の鏡が……
美しく変身した僕が四つん這いで快感に身体を震わせてる様が写っていた。

はっはっ!!

「はっはあああん、い、いやだあ!!!!」

「おおお締まる!お前こそ変態だ、やられてる自分を見てアソコ反応させて!」

「あああん、違う……ああん、違う!!」

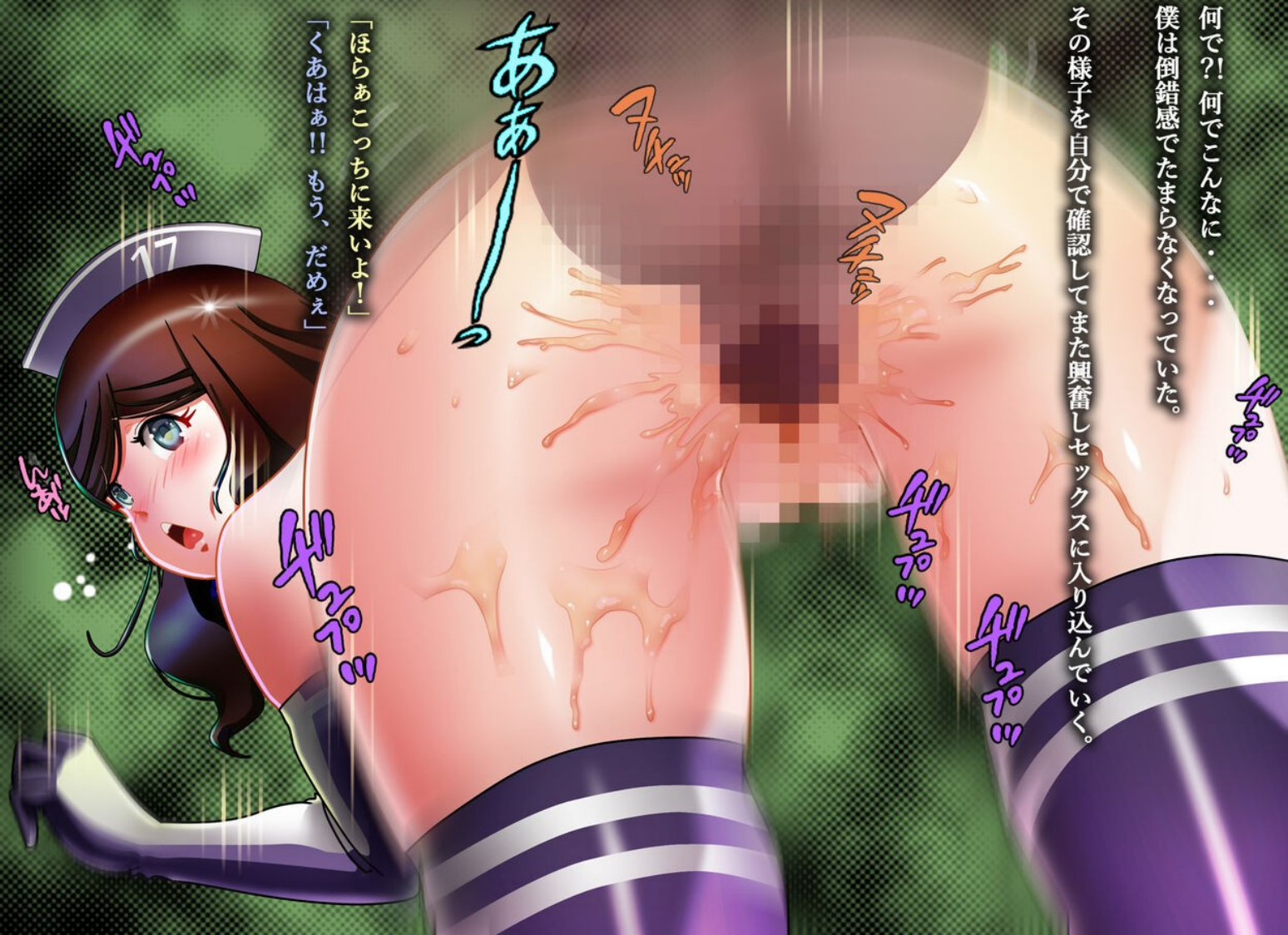


何で?! 何でこんなに・・・
僕は倒錯感でたまらなくなっていた。

その様子を自分で確認してまた興奮しセックスに入り込んでいく。

「ほらあこつちに来いよ!」

「くあはあ!! もう、だめえ」





「はぁあん、やられてる！私女の子になってこんな男にいい！」

「くはぁ、出そうだ。もちろんたっぷり中出ししてやるから覚悟しとけ！」

「だめ！待って待って!!」



中を動き回る男のアレ・・・
僕は為す術もなく快感に溺れていく。

「くはあ、なに？なんか来る!？」

この身体はまるで全身性感帯だ。

未知の快感が迫ってくるのが分かる・・・

「イヤッ・・・待って、イヤ!!」

41
70
ッ

「ウソつけ!嫌がってるフリしてたっぶり味わってる
だろ?もうすぐこのエロい身体の中に・・・
ぐはあ!イクっ!!」

「待って、あぁっ!？」

ん
ん

ん
ん

41
70
ッ

41
70
ッ



んあゐゐゐ

「おおっ！で、出るう!!! たまらないい!!」
「ダメえ!! くはあああ...」
ああ、中出しされてるう
僕、男なのに... はあああ!!

いあゐゐ



女の子の絶頂を初体験してしまった・・・
男とは違う圧倒的な快感、たまらなかった・・・

僕は異性の快感に包まれたまま眠ってしまった・・・

焦げ臭い匂いに目を覚ました。何だこの感じ……
まさか火事!?

に、逃げなくっちゃ。



もうもう!!



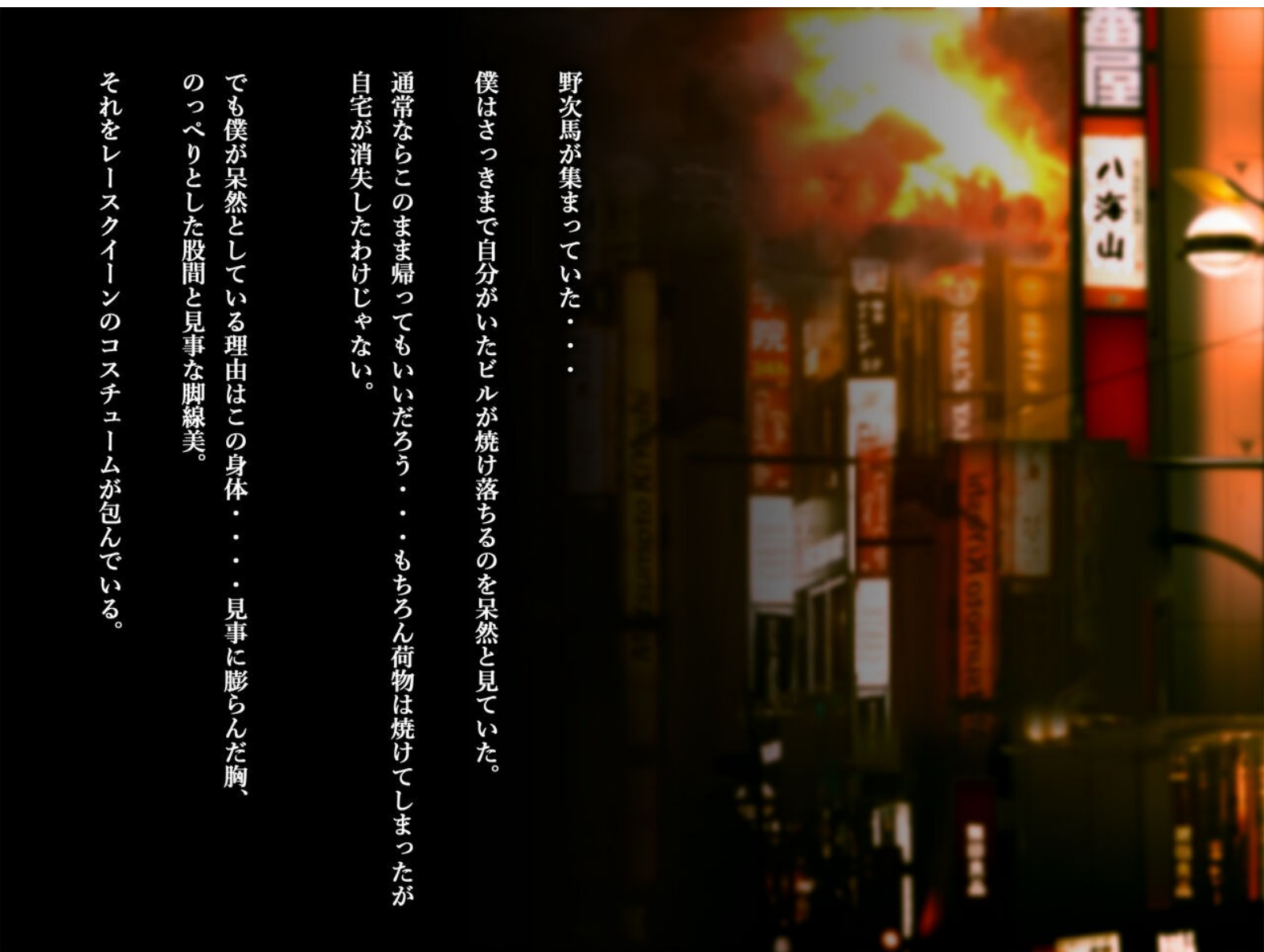
野次馬が集まっていた・・・

僕はさっきまで自分がいたビルが焼け落ちるのを呆然と見ていた。

通常ならこのまま帰ってもいいだろう・・・もちろん荷物は焼けてしまったが
自宅が消失したわけじゃない。

でも僕が呆然としている理由はこの身体・・・見事に膨らんだ胸、
のっぺりとした股間と見事な脚線美。

それをレーススクイーンのコスチュームが包んでいる。



野次馬の半分以上は僕のエロボディをいやらしく見ていた……
刺さるような視線の中茫然としていた。

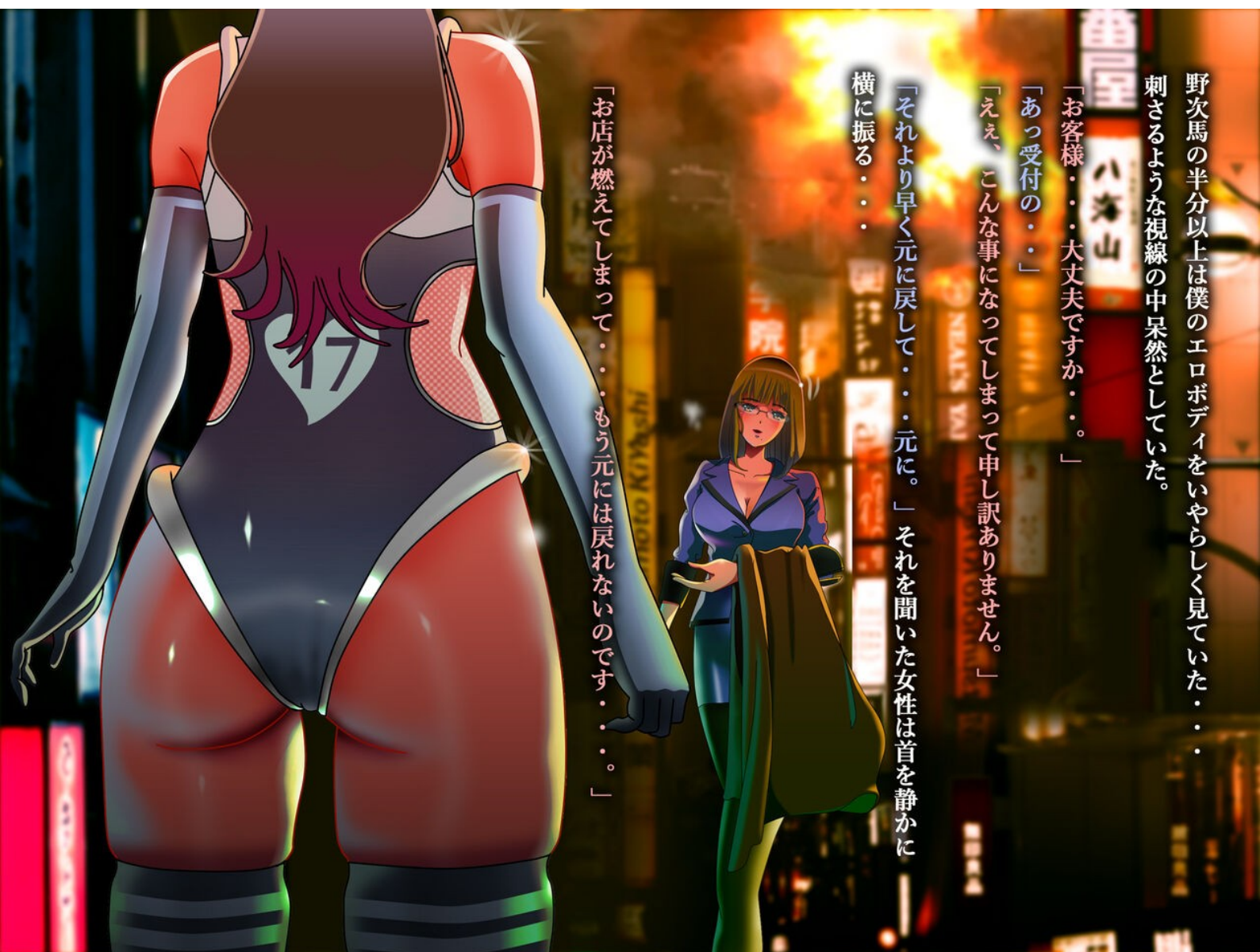
「お客様……大丈夫ですか……。」

「あっ受付の……。」

「ええ、こんな事になってしまつて申し訳ありません。」

「それより早く元に戻して……元に。」それを聞いた女性は首を静かに
横に振る……

「お店が燃えてしまつて……もう元には戻れないのです……。」



戻れない……

何だ？

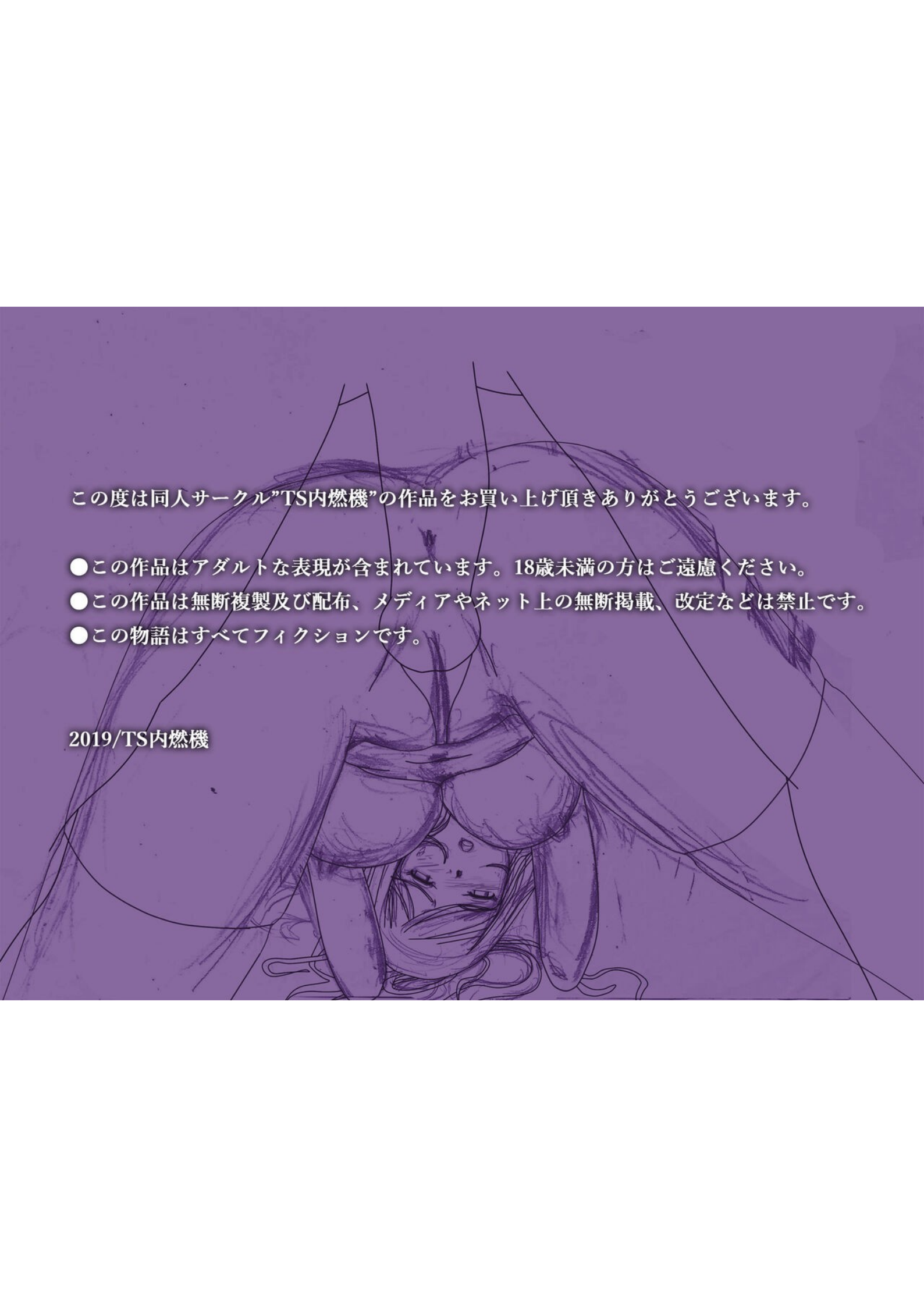
僕は戻れないことに妙な興奮を覚えていた……はぁ……
それを見ていた女性がスッとコートを僕に掛けてくれた……



「お客様・良かったら私のマンションにいらっしやいませんか？」

「えっ?!」

終わり・・・



この度は同人サークル”TS内燃機”の作品をお買い上げ頂きありがとうございます。

- この作品はアダルトな表現が含まれています。18歳未満の方はご遠慮ください。
- この作品は無断複製及び配布、メディアやネット上の無断掲載、改定などは禁止です。
- この物語はすべてフィクションです。

2019/TS内燃機